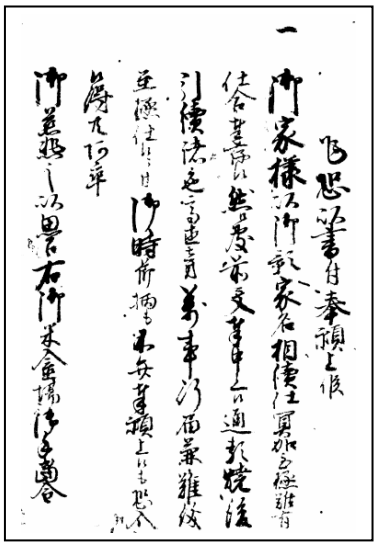
文章を読む４



前回の続きです。(I)の最初萬は「萬」(万)という字ですが、今は余り使わないので、馴染(なじ)みがないかもしれません。次の事は「事」。これは崩していない「事」で、普通は事という感じで出てきます。「事」は頻出する字ですので、覚えておいてください。次は行ですが、彳が「彳」です。もし丶がなければ「亻」です。旁(つくり)の了は「了」という字にも見えますが、「彳」と合わせて考えると「行」という字です。次の届は屆という感じですが、よく見ると尸と右側が少し曲がっています。すると「届」？となり、「行届」で意味も通ります。兼は兼という感じですが、縦２本の線とその周りの丶 丶から「兼」という字ではないかと想像できます。問題は「行届兼」の読み方ですが、「いきとどきかね」と読みます。「～しかねる」の「かね」です。この「～兼」はよく出てきます。

(I)

(J)は上の難はもう何回か出てきましたが、「難」。次の儀は頻出するので崩してありますが「儀」という字です。次の至と極は第６回で出てきましたが「至極(しごく)」です。至は第６回の亜ほど崩してありません（が一見「豆」や「亜」に見えてしまいますね)。次は「仕」。最後の３文字（3文字かどうかも難しいのですが）は一続きの言い回しなのですが、「候(そうろう)ニ付(つき)」と書いてあります。候を一文字だけ取り出しても「候」と読むのは大変です。また、付を一文字だけ取り出してもやはり「付」とは読みにくいです。ところが、間にニとあるので、三文字で「候ニ付」となります。なお、ほとんどの場合「候ニ付」の「ニ」はカタカナが使われます。これ以外に「ヲ」や「ハ」、「ル」もカタカナが使われることが多くあります。

(J)